

(一) はじめに、阿仏尼と和歌の関連

阿仏尼(安嘉門院四條)の青春期が描かれた中世女流日記群に位置する『うたたね』は、それまでに著された中古の日記とも中世の日記とも異なる特異な性質をもっている。これは一概には言えないが、例えば年次・日時の表記のないことや作者と関係をもった人物の臚化表現をはじめとして、まるで阿仏尼を主人公とした小さい物語(もしくは小説)を模したといっても言い過ぎではないくらい、主題・構成・場面展開がまとまりをみせていることにまで及ぶ。

さて本論では、『うたたね』の二十二の和歌からこの作品を解していくことを目的とする。なぜなら先にあげたような特異な性質の中の一つに、作中の和歌がすべて作者一人のもので、独詠歌といってもよいような一人称の心情表現であるからだ。これはほかの日記にも物語にもない独特の表現方法である。この事が散文作品と和歌との関わりとは何か、日記作品中で詠まれる和歌がその作品内で何を語れるのかという問題をも解き明かしてくれるヒントのような気がするのである。それではなぜ和歌を中心においたかを考えたい。

まず、この時点では阿仏尼の背景にはないが、将来的に出てくることとして歌人の家の流れがある。それも冷泉家の祖である藤原為相の母として。これは阿仏尼が単なる女流歌人であるということだけに置いておけない、ということにつながりはないだろうか。また、『うたたね』成立論は様々あるが、後に補稿して成立したのなら、歌人として世に知られるようになった後の阿仏尼の影響がこの作品にも出てきはないだろうか、と考えたのである。ちなみに歌人である彼女は、現在確認できるもので八十七首の和歌を詠んでいる。『安嘉門院四條百首』『安嘉門院四條五百首(後半五〇六首のみ残存)』のほか、本作『うたたね』に二一首、『十六夜日記』に短歌八八首、長歌一首、勅撰集で

は『続古今集』以下に四八首、『夫木和歌抄』に五九首、「摂政家月十首歌合」に九首、このほかに四五首ある(注1)。よって、本作の二一首は全体の二パーセントにすぎないのでこの二一首だけをもちて阿仏尼の和歌世界を読み解けるとは考えられないが、小品の中において散文と融合した彼女の和歌がどのようなかを考えることはできるだろう。また、後の阿仏尼の著作に歌論書である『夜の鶴』がある。この存在からも彼女と歌との関わりが強いことがわかる。歌人ともまた歌学者ともいえるべき人物となる彼女の、若かりし頃の作品内和歌の確意義義となるだろう。

(二) 『うたたね』内の和歌

それでは『うたたね』中の和歌について、話の順番通りに一首ずつ追っていききたい。なお、事件と時間の推移の展開から八節段に分けられた長崎健氏の区分を用いる(注2)。

I これまでの概括(一五八頁一行目〜一五九頁六行目)

作品冒頭は美辞麗句を連ね、というのが散文世界の決まりごとらしく、この作品も古歌や『伊勢物語』、『源氏物語』を様々に引き散りばめている。そしてその第一首目は、太秦に詣でた帰途、法金剛院の庭へ立ち寄った時の歌で、まるでこれからの展開を予感させるような歌である。

折しも風さへ吹て、物騒がしくなりければ、見さすやうにて発つ程、
1 人知れず契りし仲の言の葉を嵐吹けとは思はざりしを
と思ひ続けるにも、すべて思ひ混ずることなき心の中ならんかし。

この歌で作者は恋人と交わした言葉を嵐が吹いて散らしてくれとは言わないものを、と彼との交信のないこと、心の通うことがないことを嘆いている。そして彼の言葉は風に吹かれてどこに行つたのか、作品中にはついぞ見られないのである。『古今集』七八二番・小野小町「今はとてわが身時雨れにふりぬれば事のほさへにうつろひにけり」のようにうつろう言葉であり、『新古今集』五一五番・前大僧正慈円「問ふ人もあらし吹きそふ秋はきてこの葉にうつむやどのみらしば」のよ

うに、秋の木の葉と同じ運命を辿る言葉である。
II 恋愛の現状(一五九頁七行目〜一六二頁六行目)

そして彼女は彼の手紙を見る。

この御文をつくらと見るにも、日比のつらさはみな忘れぬるも、
人わろき心の程やと、またうちをかれて、
2 これやさは問ふにつらさの数に涙を添ふる水茎の跡

彼女が出さずじまいになつてしまつた歌である。彼の言葉は本文中に見られることはなく、この歌に来訪の事実のみ認められる。『新古今集』八二六番・按察使公通「かきとむることのはのみぞみづぐきのながれてとまるかたみなりける」のように、水茎は故人や去つた者への追想を呼び出す形見や涙と結びつくから、二首目にして彼女は彼との関係の位相を読者にしらしめているといえよう。

III 出家の決意(一六二頁七行目〜一六三頁二行目)

秋に始まつた日記一年目の十二月、作者は出家の決意をする。引き歌によつて散文に彩りを添えているが、ここには和歌はない。

IV 出家行(一六三頁三行目〜一七〇頁四行目)

出家への決意をした次の年の春、実際に出家という行動を起こす前まで彼女の思いは高まらっていく。そして、明らかに浮舟物語系をベースにした歌まで詠まれるのである。

3 歎きつ、身を早き瀬のそことだに知らず迷はん跡ぞ悲しき
身をも投げてんと思ひけるにや。

『源氏物語』浮舟巻「嘆きわび身をば捨つとも亡き影に憂き名流さむことをこそ思へ」と、同じく手習巻「身を投げし涙の川のはやき瀬をしがらみかけてたれかとどめし」による歌だとわかるだろう。そして夜中に髪を切り出奔するのである。恋人の心をはかるための行動だろうが、この彼女の行動力と気持ちの高揚を表現した文章は、冒頭の美文調よりもはるかに真実味が感じられ鮮やかである。そして尼寺での出家の後、ひとまず仏道への思いがこめられる。

4 捨てて出でし驚の御山の月ならで誰を夜な〜恋わたりけん
過去のことをふりかえり、それでも思い切れない恋人への思いを和歌を詠むことによつて自覚しているようにとらえられる。

5 みちのくの壺の碑かきたえて遙けき仲となりけるかな

『古今六帖』一七九九番「みちのくのちかのしほがまちかながらはるけくのみもおもほゆるかな」や『新古今集』一七八六番・前右大将頼朝「みちのくのいはで思ふはえぞしらぬかきつくしてよつばのいしぶみ」にあるように陸奥の歌枕を入れた歌である。これから先、紀行篇と呼ばれるところにもなるとまた歌枕が多く見られるようになる。

6 思ひ出づる程にも波は騒ぎけりうき瀬を分けて中川の水

『源氏物語』手習巻「はかなくて世にふる河の憂き瀬には尋ねも行かじ二本の杉」に使われた「憂き瀬」を、『後拾遺集』九六六番・式部命婦「ゆくすゑをながれてなににたのみけんたえけるものをながはのみづ」のように詠まれている「中川の水」が流れている。彼女と恋人との仲を比喻している語句が詠まれている。

7 世とともに思ひ出づれば呉竹の恨めしからぬその節もなし

そして「遙けき仲」「中川の水」と歌に呼んだ語句で、恋人との距離の遠さを再確認したのち、「思ひ出づる」とすでに過去のこととなつてしまつたことを言葉にすることで自覚していくしかないものである。

8 消え果てん煙の後の雲をだにとも眺めじな人目もるととて

と覚ゆれど、心の中ばかりにくたし果てぬるは、いと甲斐なしや。
『源氏物語』柏木巻「行へなき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ち離れじ」の歌をひいて、送ることのできなかつた和歌を詠んでさらに内省する。出家したが憂き世からとうてい逃れ得ない思い、それらを歌一首一首の展開で綴っているのである。

そして愛宕で詠まれた本作の題の由来とも言える歌がくる。恋の相手とすれ違う場面のおとにかれることで、二人の関係のはかなさへの嘆きが見られる。

9 はかなしな短き夜半の草枕結ぶともなきうた、ねの夢

八代集の中で、結句に同じように「うた、ねの夢」とくるのはつぎの『新古今集』二五六番・式子内親王「まどちかき竹のはすさぶ風のおとにいとどみじかきうたたねの夢」だけである。また、『源氏物語』明石巻「たび衣うら悲しさにあかしわび草のまぐらは夢も結ばず」とも関係あるようなので、この歌と題名について次章で更に考えたい。

V 帰家（一七〇頁四行目）一七〇頁十四行目

病氣療養中、旧居で続けざまに詠んだ歌が三首ある。

10 置く露の命待つ間の飯の庵に心細くも宿る月影

11 待ち慣れし故郷をだに訪はざりし人はこゝまで思ひやは寄る

12 消えかへり又生くべしと思ひきや露の命の庭の浅茅生

『源氏物語』桐壺巻「いとゞしく虫の音しげきあさちふに露おきそふる雲のうへへ人」「かきりとて別る、道のかなしきにいかまほしきは命なりけり」をひくところに、病氣を伴ったための心弱さが感じられる。

そのように出奔以来命を縮めるような思いをしてきたことよって、結局彼女にとって出家は救いとならなかったのである。それは、「露の命」というように自分の命を思う二首に挟まれた11の歌が、切々とした恋人への思いであることから読み取れるだろう。

VI 遠江下向への決意（一七〇頁十五行目）一七一頁十行目

病氣療養の後、養父に遠江行きを誘われ、決心をする。

VII 遠江行（一七一頁十一行目）一七五頁一行目

そして、後半の紀行部へと時間は移っていく。

程なく、逢坂山にもなりぬ。音に聞きし関の清水も、たへぬ涙とのみ思ひなされて、

13 越えわぶる逢坂山の山水は別れにたへぬ涙とぞ見る

「関の清水」、「逢坂山」と歌枕を詠んで紀行部の和歌は始まる。

14 住みわびて立ち別れぬる故郷もきては悔しき旅衣かな

後年『十六夜日記』でも通った野路の藤原である。『うたたね』で故郷への思いを歌ったことを思ったのか、後年も故郷を思った歌を詠んでいる。9で関係歌とした『源氏物語』明石巻「たび衣うら悲しさにあかしわび草のまぐらは夢も結ばず」もこのように旅に出た時にこそ脳裏に浮かぶようである。

15 思ひ出でて名をのみ慕ふ都鳥跡なき波にねをやなかし

「都鳥」という時点で『伊勢物語』の影響が思い起こされる。また、これまでの和歌では『拾遺集』九九番・よみ人しらず「やまざとにやどらざりせば郭公きく人もなきねをやなかし」に代表されるように

「ねをやなかし」の対象はほととぎすや鶯であった。だが、ここでは鳥が対象とはならず、自分が泣きたいと思うほどである、と都を恋しく思う気持ちが出てくる。

16 これやさはいかに鳴海の浦なれば思ふかたには遠ざかるらむ
旅に及んで、彼女の歌に見える嘆きの姿勢は、恋しい人のいる地である都を離れる淋しさへと変化している。これは『伊勢物語』の影響もあるし、また土地土地で旅情を表現することが大事だったからであるからだろうか。

17 心からかゝる旅寝に歎くとも夢だに許せ沖つ白波

目的地である遠江では、『源氏物語』の須磨・明石巻を借りた表現が多出する。そしてここで詠まれたのはこの一首のみである。題名との関連から「夢」という言葉も頻出する本作なので、旅寝に及んでやほり夢にまで故郷を思うのである。

VIII 帰京（一七五頁一行目）一七七頁一〇行目

17まで京から離れていくことを詠んでいるが、次から京へ向っていく。神無月の二十日頃に京を立ち、そして霜月の末には帰京という、なんとも短い旅であった。また乳母の病氣というのがその帰京の理由だが、彼女の喜びようは復路の部分の短さにあらわれていて、この後一息に都への道を綴るのである。

18 忘るなよ浅木の柱変らずは又来て馴る、折もこそあれ

『源氏物語』真木柱巻「今はとて宿離れぬとも馴れきつる真木の柱は我を忘るな」をひいていることが一目瞭然である。居住地を離れる時に屋敷内の物に思いを残すのは『更級日記』でも見られる。これも典型的だといえる。

19 かきくらす雪間をしほし待つ程ぞやがとゞむる不破の閑守

20 このたびは曇らば曇れ鏡山人をみやこの遙かならねば

「不破の閑」「鏡山」というように歌枕を用いること、そして天候が記述されることで旅の様子が語られる歌である。本作は地名と天候の記述が多いことを特徴としているが、歌にもその特徴があらわれている。

21 君もきはよそのながめや通ふらん都の山にかゝる白雲

『源氏物語』明石巻「ながむらむ同じ雲井をながむるはおもひもおなじ思ひなるらん」を用いて都を思う。18は分かなりやすく『源氏物語』を引いて詠んだ歌であるが、あとは歌枕を詠み旅情を喚起させているだけでなんら恋の思いは感じられない歌であった。だが、作品中最後の阿仏尼作の歌である21の歌は、都への心がはやる中詠まれ、また唯一「君」という言葉を使い、主題の一つである恋の思いをあらわにしているといえよう。

22 われよりは久しかるべき跡なれど偲ばぬ人はあはれとも見じ

この歌は阿仏尼の歌ではなく『続後撰集』雑中の中務の歌である。本作の最後に付加されたが、なぜ古歌や有名な和歌ではなく同時代の勅撰集にとられた和歌を用いたのかなど様々な問題がある。今回は阿仏尼の和歌のみ焦点を当てたのでこの問題は以後考えて行きたい。

(三) 本作の和歌の特徴

(一) で和歌について大筋を追ったが、本作の和歌の特徴をまとめるとほぼ次のようになる。

① 歌の前のくる散文部のまとめた役割が多い。

これは2・4・5・6・7・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21番の歌にみられる特徴で、情景や心情を散文部で言い尽くした後、和歌でそのことを一括して述べているのである。紀行部の歌はみなこのようであるが、全体的に見ても大概和歌はまとめのように使われている。これは和歌が作者ひとりのものだからで、和歌を詠みあう相手がいないため、歌で話の展開を追うことがないからである。また、心中表現を和歌に託したと見られる表現もあるが、それらはほぼ紀行部より前の方に現れている。また、まとめに和歌を置くことで場を引き締める役割をもたせていたようである。

ちなみに長崎氏は、『うたたね』における詠歌の位相は、これまでの物語や女流日記に

みられるように、事件の説明、展開の契点として用いられることが少くして、(歌枕での詠はこれを除くとして)ある事件の渦中を去ってからの、静思としての感慨をのべるものがほとんどである。(注3)

と、そのまとめた和歌の役割を述べられている。また松尾葉江氏は散文部分の結論を和歌が繰返す形について、

『うたたね』では、一定した主人公の視点で綴られている叙述の一部を担うものとして和歌も位置しているのである。他者に向っての働きかけや他者とのコミュニケーションによってもたらされる自己客体化、或いは自己の内部を凝視の対象とし分析して行くような視点の変化は見られない。(注4)

と述べられている。これも、日記にあらわれる和歌が一切他人との交流がない自分ひとりのものであるから、作品中でこのような役割を当てられているのだといえる。

② 散文部の語彙との重複が多い。

これも①の特徴と重なるが、1・2・4・6・7・10・13・14・15・16・17・18・19・20・21番の歌についてみられる。一度使用した語句を歌に詠むことで重層性を狙ったとは解しようがなく、どちらかという用語彙のなさを露にしているようにも見受けられる。

③ 紀行部の歌は歌枕によりかかるため歌に新鮮味が少ない。

紀行部に当る13番以降の和歌はそれまでの紀行文学の伝統を踏襲するかのよう歌枕を詠み込んでいる。『伊勢物語』や『源氏物語』の表現が使われるのも同じ理由だが、独自性がなくなるためか平易な印象を受けるのはやむを得ない気がする。

④ 本歌取の手法が少ないかわり、散文部に引き歌が多い。

阿仏尼の和歌的教養については、武田孝氏が対象を彼女の全作品として綿密な調査をなされている。それによると、『古今集』以下の勅撰集から様々な影響を受けているが「特に大きな影響を受けたのが『古今集』と『新古今集』に収められた歌であった」(注5)と結論付けられている。また阿仏尼の歌風について、

特に『十六夜日記』の中の歌には、掛詞や縁語の使用が著しい。しかし、『安嘉門院四條百首』および『安嘉門院四條五百首』を通じて

見る限り、『古今集』的な技巧の存在は認められるが、むしろ修辭が少なく、素直な感じを受ける歌が多い。(略)ただし、彼女の歌には、本歌取の手法は、意外なほどに少ない。これは、彼女の歌が、新古今的であるよりも古今的であったことの、一つの証ともなる。(注6)

と述べられている。実際、わかりやすい本歌取でなければならぬが定義づけは難しいのだが、今回調査した範囲でも新たに本歌取の発見はなかった。しかし、和歌内に特殊な語句がみられるわけでもなく和歌そのものの印象が平易であることは、和歌の伝統にのっとっているからである。それはそれだけ和歌を知っていることであり、散文部の引き歌の多さとその融合表現の完成度が高いことは、彼女が自分の和歌知識を表現できるのが作歌に対してではないことを裏付けてはいないだろう。

⑤自分の行動、思いに重点が置かれると歌の頻出は少なくなる(出奔の所等)

今閑歌子氏はこのことについて、出奔が劇的な場面展開であるにもかかわらず、そこには歌が一首もない点には既に触れた。その理由は、ひとつには踏襲する類型がないからであろう。出奔は、破格な行動であって、いわゆる様ではない。都回帰にも歌枕にも無縁である。(略)出奔とは対照的に、『うたね』紀行部は、出奔から帰京までが、類型的に和歌で述べられるのである。(注7)

と述べられている。歌は作品全体を覆っているのに、目に見える和歌表現だけでなく引き歌もその役割を受け継いでいるといえる。それでもやはり、出奔場面には引き歌すら姿を見せない。このことから、表現を鮮やかにすべきところとそうではないところの区別がはっきりしていて、歌にどういう意味をおきたいのか明確であるともいえる。

以上五点が、『うたね』における和歌の特徴だと考えられた。次に題名の由来ともなった九番歌について考え、それから全体をまとめた。

(四) 題名についての試論「うたね」との関連

さて『うたね』という題名が、本作中に現れる歌の「うたねの夢」から来ていることは既に述べた。当代において創作された物語類にもよく見られた、歌語表現からタイトルをつけるという方法と同じであろう。そういう意味では、この作品が従来の日記文学よりも物語文学に作品の質は似通っているのかとも考えられるし、中世らしいといえはそうなのかもしれない。中古の日記は人物名に「日記」を加えたものが主流で「更級」あたりは特殊な例だが、中世では「とはずがたり」「竹向きが記」など独自のタイトルがあるものもあるからだ。事実、今回ここで明確なことはいえないが、物語的要素と日記的要素を分類しその作品を捉えることができるなら、この作品は他の分類可能な作品より分類が困難であろう。それだけ物語と日記との境に位置する作品といってもよい作品である。

さて、『うたね』の物語的要素と関連することについて一つあげたいことがある。それは『うたね』という名の物語が実際にあったということである。「あった」というのは、それが散逸物語で書名と数首の和歌しか残っていないからだ、看過できない問題である。『別冊国文学』王朝物語必携の解題によると、

散逸。風葉六。帝が親王の時、女(后宮)は閑遠な訪れを嘆いてよそに移り住む。桂の尼のもとか。皇后宮の荷合せの場面あり。題は古今(五五三)による。(注8)

とある。現在では、実際には五首で、もう一首は『うたねの宮』という同じく散逸物語の和歌だと考えられている。ちなみに解題にある「皇后宮の荷合せの場面」とは、散逸物語『うたねの宮』の歌の詞書にあるもので、散逸物語『うたね』に現れる場面ではない、というのが最近の研究の主流である。

また、この題が『古今集』五五三番・小野小町「うたねにこひしき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき」の影響を受けているというが、この小町の歌が本作『うたね』とまるで関係してないわけではない。本作の作者の恋人は、まるでうたねの夢に見たかのように

で曖昧な印象を受ける。その夢を頼みにする姿勢は同じだろうし、また本作の中でも何度か小町の歌を取り入れているので、作者の意識下にあったことだろう。

散逸物語『うたね』に戻るが、この物語から『風葉和歌集』にとられた五首のうち、「きさいの宮」といわれる人物の歌が三首ある。

(巻六 冬)

みかど、みこと申しける時、ひさしうおとづれさせ給はざりけるころ、しぐれのおとまどほにききなされさせ給ひて

うたねのきさいの宮

379 おとたえぬしぐれにつけて思ふかな契りし人のかからましかば

(巻十三 恋三)

みかど、みこと申しけるときかよひ給ひける、かれがれにみえさせ給ひければ、ほかへうつろひ給ふとて、かきおかせたまひける

うたねのきさいの宮

974 いづかたへゆくともいはじなかなかにとはずは人のつらさみえな

(巻十五 恋五)

みかどひさしうとはせ給はざりけるによませ給ひける

うたねのきさいのみや

1106 秋のよの草葉におきてあかせどもつゆ哀とてとふ人もなし

この三首の詞書・和歌から、いずれも本作との設定・状況が似ているように読み取れるだろう。特に、帝(当時親王)の訪れをひたすらに待つ皇后の図は、若き日の阿仏尼が恋人を待つ図と似通うところがあると考えられる。また、九七四番の歌にある「とはずは人のつらさみえな」は『うたね』の二番目の和歌にある「問ふにつらさの数」に一致する。この言葉は中世当時の愛用句で『とはずがたり』や勅撰集に見える(注9)。よって今の研究状況ではこの散逸作品の成立時代ははっきりしていないが、この語句の用法から中世の作品ではないかと推測することができ、また本作との前後関係もやはり明らか

にはできないが、お互い影響関係にあると考えられないだろうか。皇后が帝の訪れの閑遠なことを嘆く、その状況に自分を見立てタイトルを借り背景にこの作品の存在を見る、ということである。もしくは阿仏尼がこの散逸物語『うたね』を書いたか、という想像もできなくはない。ちなみに『風葉和歌集』は一二七一年成立で、為家が撰者と考えられている私撰集である。阿仏尼の手伝いがあったのではとされているため、彼女がこの作品を知っていた可能性は非常に高いと思われる。

いずれにしても、本作は自己を語った日記であるよりも物語に近い性質を持つ作品である。この虚構性という点について最近の田淵句美子氏の御論(注10)が詳細であるが、更に『うたね』の有する虚構性を様々な方面から解明することができるとはならないかと考えられた。そこで、今は散逸して歌数首しか残さないが物語として存在した『うたね』と、一応日記文学に分類される本作『うたね』との関連の一面から見ることができるとはならないかと考えてみたのである。散逸作品に残された歌の孤独の嘆きを、必ずしも本作『うたね』が受け継いでいるとは考えられない。だが、本作が作者一人の和歌しか残さないとすると、そのように和歌を配置することによって自分が一人であることを語り、そして日記本文を形成したのではない、ということがわかる。以上、まだ更に考える余地はあるが、試論として散逸物語『うたね』の存在をあげた。

(五) まとめ

歌人としての阿仏尼にとって、この『うたね』を占める和歌は成功だったといえるのだろうか。当時和歌は日常生活から切り離せない時代である。だから、日記であろうと物語であろうと歌が出てくるのは当然のことであった。しかし、歌を詠む行為は重要だったに違いないが、この作品には和歌を詠むことでの言葉の交流、心の交流がない分、和歌の必要性が感じられず散文のみで可能だった作品のようにも同える。かえって、散文部分にちりばめられた引き歌に和歌の知識と

心が詰まっていることの方が、作品を解する上で重要な気もするのである。それだけ『うたたね』に關して言えば、和歌を読み解く重要度が低いようにも感じられた。

だがこのことは、作品の中で和歌を詠むこと、和歌が位置することの重要性が心の交流だけではないことをいつているのではないかも知考えられ。つまり、他人との交流やそれに関する記述はあっても、作品全体を独白調にすることで、本来心通わしているべき相手（恋人）との間の言葉の足りなさを読者に示し、和歌を取り入れないことで逆接的に相手への気持ちの通じなさを訴えたものとも考えられるのである。思いが届かないから歌を詠む、ただ、届かないとわかつているため散文部で既に表現された言葉の繰り返しになるということだ。いや、実際には交わしたであろう和歌を作品に取り込まないことによつて、更に恋人の人物設定を醜化する事が可能だった、ともいえるかもしれない。

今関氏によると「古代物語、和歌を充分に享受した作者は、実人生に於ける体験を、古典の教養を駆使して自己劇化したのである。」（注11）というように、彼女は日記に物語を描くかのような手法を用いた。本作の「日記における自己物語化」の技法とも考えられる。そしてその裏づけとしては、渡辺静子氏が指摘されたように（注12）、『うたたね』には『源氏物語』『伊勢物語』『大和物語』などの古典物語のほかに、『万葉集』『古今集』『拾遺集』『新古今集』などからの歌の引用があることがある。

更に、先学らの『うたたね』和歌の研究では特に長崎氏の論が詳細なのだが、氏は『うたたね』にみる阿仏尼の詠歌は、和歌世界での伝統的な技法、歌用語を用いて自分の心情を一定の世界に定着させているもので、その世界の構築において自己の心情の客観化がなされることになっている。また、散文としての地の文での叙述においても、この伝統的な和歌的世界が用いられていて、それが詠歌と対応されることで、より重層的になっていると言えよう。（注13）と述べられている。日記にあらわれる和歌世界観が和歌だけでなく散

文において著されること、これは彼女の心情を表現するのに最も適していたからであり、それが彼女の歌人としての資質をあらわしたところなのである。

最後になるが、最初私は阿仏尼がこの作品を書いたことの一つに「和歌をいかに散文に取り込むか」という実験意識が少なからず働いていたのではないかと考えていた。それは何度もうように彼女が後年有名な歌人となり、また歌論書を著す人間となるからである。更に、作品中に和歌を幾重にも取り込んでいく割に、個々の和歌に際立った個性がないと感じられたからであった。そして結果、作者は作品内に歌人としての教養を知らしめたと同時に、散文作家としての資質をも知らしめることとなった。それだけ和歌をなくしては成り立たない作品だといえる。また、今回引き歌について述べることはなかったが、本作の引き歌について、表面上だけの模倣で深みがないという指摘もある。しかし、成立時は確定していないが、阿仏尼がまだ若い時の執筆である本作中に、かなりの数の和歌が詠み込まれ彩られていることは、将来の阿仏尼の姿を彷彿させているだろう。本作の和歌を確認する意味はそこにあつたようにも思われるのである。

◎参考文献

*『うたたね』の引用は、福田秀一校注・新日本古典文学大系『中世日記行集』（岩波書店）により、歌の出でくるページと行を入れた。和歌には新編国歌大観番号を用いた。

『校註阿仏尼全集』 梁瀬一雄・編 昭和三十一年一〇月

『うたたね』全訳注・次田香澄（講談社学術文庫） 昭和五十一年一月

『中世日記行集』 福田秀一・校注 新日本古典文学大系（岩波書店） 平成二年一〇月

注1 次田香澄氏『うたたね全訳注』解説（講談社学術文庫） 昭和五十一年一月

◎その他の参考文献

・長崎健氏『うたたね』―「心情」の表現―『日本文学』35 昭和六一年一月号

・長崎健氏「歌人阿仏尼の位相」『古典和歌論叢』犬養廉・編 昭和六三年四月

・渡辺静子氏『うた、ね』における古典撰取の方法『女流日記文学講座六 建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』平成二年一〇月（和歌調査詳細）

・寺島恒世氏『うたたね』の試み『国語と国文学』六十九巻五号 平成四年五月（和歌調査詳細・ほぼ全首）

- 注2 長崎健氏『うたたね』の構想と執筆意図『女流日記文学講座六 建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』平成二年一〇月
- 注3 注2と同じ
- 注4 松尾筆江氏「歌文融合―中世文学における和歌と散文とのかかわり―」『和歌文学の世界第十集 論集和歌とレトリック』昭和六一年九月
- 注5 武田孝氏「阿仏尼の教養について」和光大学人文学部紀要第二〇号 昭和六〇年三月
- 注6 注5と同じ
- 注7 今関敏子氏『うた、ね』に於ける和歌『日記文学研究 第二集』日記文学研究会・編 平成九年一二月（和歌調査詳細・全首について）
- 注8 『別冊国文学 王朝物語必携』
- 注9 『とはすがたり』に「御涙もこほれぬれはとふにつらさもいとかなし」「いかなる事そなとたつねる、もとふにつらさとかやおほえて」など四例。勅撰集に、『続古今集』一二四一番・西院皇后宮「わすれてもあるべきものをなかなかにとふにつらさをおもひいでつる」ほか、『続古今集』一六八八番、『続拾遺集』四四二番、『新後撰集』一五五四番、『新拾遺集』九〇七番など。
- 注10 田淵句美子氏『うたたね』の虚構性『国文』（お茶の水女子大学）八九号 平成一〇年七月
- 注11 今関敏子氏「女流日記文学における『うた、ね』の位置」『女流日記文学講座六 建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』平成二年一〇月
- 注12 渡辺静子氏『うた、ね』と「十六夜日記」『大東文化大学紀要』一四号 昭和五十一年三月
- 注13 長崎健氏「阿仏尼『うたたね』考」『紀要』通巻一一八号文学科五七号（中央大学文学部） 昭和六一年三月（和歌調査詳細：1・2・4・5番について）